

著者が語る
社会調査テキスト

佐藤郁哉 同志社大学商学部 教授

佐藤郁哉 著

『フィールドワーク —書を持って街へ出よう』

新曜社
初版1刷 1992年9月
増訂版1刷 2006年12月

たしか1989年か90年のことだったと思う。別の用事もあって、当時勤務していた茨城大学のある水戸から東京に出かけた際に、新曜社の編集者だった塩浦さん（現在は同社社長）から、同社の「ワードマップ」シリーズの1冊として何か書けないか、というお話をいただいたのである。これが『フィールドワーク』を書くことになる直接のきっかけであった。

しばらくしてから塩浦さんに、「フィールドワーク」をテーマにすること、また「です・ます調」で書くことの2点について了承していただいた。塩浦さんは、後者については前例が無いということで当初は難色を示されていたのだが、最終的には了解していただいた。私自身にとってもその種の文体で書くのは初めての試みだったが、入門書であるという以外に、自分が専門的な内容をどれだけかみ砕いて書けるのかを試してみたいという思いもあった。

このようにして企画は一応スタートしたものの、その後の執筆作業はかなり難航した。というのも、その1990年前後は、現代演劇についてのフィールドワークを開始した頃でもあり、現場調査を実際に受け入れていただける劇団探しに四苦八苦していたからである。色々な伝手をたどって何度かトライしてみたものの、そのたびに失敗しており、単行本の執筆作業にとりかかる気持ちには到底なれなかった。

ようやく盛り込むべきキーワードが半ば確定して、執筆に取り組むようになったのは91年の6月初めであった。その頃までには、某劇団の活動への参加が決まり、その劇団を中心とするフィールドワークと『フィールドワーク』の執筆が並行して進むこ



とになった。この二重の作業は、時間と体力という点でかなりしんどいものであった。もっともその半面、実際に現場調査をおこなうかたわら、その方法や技法について書くことによって、実体験に根ざした解説内容に仕上がったようにも思っている。

そのような経緯を経て、最終的に全てを脱稿し新曜社宛に送付したのは1992年の3月11日のことである。37歳の誕生日であり、また第一子である長男が誕生して9日目のことであった。

『リターンマッチ』としての技法書執筆

私にとって、『フィールドワーク』の執筆には、「リターンマッチ」としての意味合いがあった。というのも、1983年から84年にかけておこなった暴走族に関する現場取材は、方法や技法という点で、我ながらかなり不満をおぼえていたからである。最終的には、そのフィールドワークの成果はシカゴ大学の博士論文としてまとめられ、日本語で2点、英語でも1点のモノグラフとして刊行することができた。

しかし、現場取材の結果として得られたデータをどのように体系化すればいいのかという点については、最後まで自信がもてなかった。それに加えて、当時勤めていた茨城大学では文化人類学関連の講義を担当しており、フィールドワーク的な方法が、質問表サーベイ（俗称「アンケート」）をはじめとする他の種類の調査法との関係でどのように位置づけられるのかという点が気になっていた。

これらの問題については、シカゴ大学時代の恩師であったジェラルド・サトルズ先生の教えを受けて、ある程度は自分なりに答えを出していたように思っていた。しかし、実際に現場で調査をしていると、



次から次へと新たな疑問が湧いてきた。『フィールドワーク』の執筆は、それらの問いに対する自分なりの答えを模索していくプロセスでもあった。

もっとも当然ながら、『フィールドワーク』を書き上げたからといって、それで現場調査に関するほとんど全ての疑問が解消できるわけではない。それどころか、新しい技法を試してみたり、新しい研究対象に取り組んでみたりするたびに新たな疑問が生じてきた。そのような事情もあって、その後も続けざまに技法書を書くことになった。その数は、単著だけでも7点、共著が2点、翻訳書が3点(内1点は共訳)であり、これに増訂版の『フィールドワーク』を加えれば、執筆した技法書の本数は合計で13点にもなる。

一方で、調査モノグラフは、暴走族活動に関する3点の後には、『現代演劇のフィールドワーク』(東京大学出版会、1999)を出し、その後『本を生み出す力』(新曜社、2011。共著)を刊行しただけである。このエッセイが本誌に掲載される頃には、もう1点、大学界を扱った書籍が共著として出版されているはずである。それにしても、「マニュアル」と「実作」のバランスがそれほどよくはないことは紛れもない事実である。

書を捨てよ、町へ出よう

もっとも、マニュアルと実作のバランスの悪さは、私の場合に限ったことではないようだ。実際、書店の本棚を眺めてみても、研究法関連のマニュアルの点数は驚くほど多く、どれを選べばよいか判断に迷うほどである。その一方で、それらの文献で解説されている方法を、実際に研究に適用して執筆されたモノグラフの本数はそれほど多くない。

これはかなり不思議な状況である。実際、演劇の場合で言えば、それは、作劇法や演技法に関するハウツー本が盛んに刊行されている一方で、実際の演劇公演にはほとんど見るべきものがない、という事態に喩えることができる。

私が大学院生であった1980年代当時は、日本語で読める方法論の教科書や解説書の本数は非常に少なかった。特に、質的方法に関するマニュアルが皆

無に近いということは、自分自身のフィールドワークについても、また調査法を講義する際にも悩みの種であった。だからこそ、『フィールドワーク』を書いてみる気にもなったのである。

その当時からすれば、現在は事態が大幅に改善されている。実際、今では、私がかつて院生時代に苦勞して原語で読んだ欧米の解説書の多くを日本語で読むことができる。また、その後海外で刊行された解説書についても邦訳が続々と刊行されている。だからこそ、調査関係の論文や報告書の中に「これはぜひ読んでみたい」と思えるものがあまり見られないという点が不思議に思えてならないのである。

もっとも考えてみれば、これは特に不思議なことではないのかも知れない。実際、ある技能に関するマニュアルの本数は、その技能の進歩の度合いを示す指標というよりは、むしろその技能や技術を習得することの難しさを示す指標となっていることも多いだろう。また、マニュアル本の多さは、本を読むだけで技能が身に付くことが不可能であることを示している場合もある。

この点については、英会話に関する解説書の数と日本人の平均的な語学力との関係が恰好の例であると思われる。当然ではあるが、何十冊あるいは何百冊の会話マニュアルを読破したとしても、それだけで実践的な英会話能力が身につくはずもない。語学力を磨いていくためには、むしろ、それらのマニュアルをどこかに置いて、あるいは捨て去ってしまっただけで、実際に英語による会話をおこなってみるしかないのである。

同様の点が、フィールドワークにもあてはまる。社会調査の場合にも、事前に技法書に目を通しておくことには、確かにそれなりの意味がある。しかし、その一方で、ある時点になったら、むしろ「書(マニュアル)を捨てて町へ出て行く」こと、つまり社会生活の現場に飛び込んでいくことこそが、どうしても必要になってくる。そのような現場実践を通してこそ、社会的行為の意味を深いレベルで理解できるようになるに違いない。